

地域医療連携の経験

佐柳 進

第62回国立病院総合医学会
(平成20年11月12日 於東京)

IRYO Vol. 64 No. 3 (187-189) 2010

要旨

関門医療センターの前身の国立下関病院は、2002年当時はまったく地域との連携に乏しく、旧市街地の中心にありながらも“孤島”の運営状況で、病院経営は最悪の状況にあった。2002年に経営改善に着手し、地域への働きかけを精力的に進め、3年後には黒字化した。とくに地域との連携強化、施設運営の体質改善に有効であった2つの取り組みを報告する。

その一は救命救急活動で、2003年「救急現場から社会復帰までの一貫した救急システム」を構築し、救急取扱患者数、救急車受入数ともに3年後には倍増、その成果で2005年に救命救急センターの指定を受け、2006年には24時間365日対応の『ER24』を開設できた。その二は、病院を場とするヘルスプロモーションの展開で、地域住民がなじみやすい言葉として、当センター独自に“健康応援”と呼び、地域展開を始めた。2005年に地域への出前講座「健康応援講座」を開始、2007年には入院患者に入院中に健康な生活習慣への復帰に向けた患者教育プログラムを開始した。地域の医療ニーズと当センターの経営戦略とのすり合わせが、地域活動の展開に最も重要である。

キーワード 地域医療連携、救急、ヘルスプロモーション、病院、生活習慣

はじめに

病院経営は、それぞれの病院の診療機能によって医療圏に広がり的大小の差はあっても、すべからくそれぞれの医療圏の医療ニーズを反映する。

国立病院機構施設は、前身の国立病院時代には、その存立基盤である国の医療政策を推進する「政策医療」を、あたかも医療の「特殊専門性の発揮」と同義に解釈し、地域の医療ニーズとはまったく相対立する概念として展開する傾向が強かった。そのため、今もって地域の医療ニーズには疎い運営体質が

残っており、病院経営の基盤を脆弱なものにしている。

関門医療センターの前身の国立下関病院はその典型で、まったく周辺地域との連携に乏しい、下関市街地の中心にありながらも“孤島”の運営状況にあった。それを反映して、病院経営は2001年には当時の官庁会計で収支率91%（現在の国立病院機構企業会計で、ほぼ85%に相当）と最悪の状況にあった。2002年より、病院経営改善に着手し、地域へのさまざまな働きかけを精力的に進め、地域連携の強化を図り、3年後には企業会計収支率で102%と完

国立病院機構関門医療センター

(平成21年5月7日受付、平成22年11月13日受理)

Some Trials of Community Health Link

Susumu Sanagi, NHO Kanmon Medical Center

Key Words: community health link, emergency, health promotion, hospitals, life-style